



中村俊定文庫
文庫 18
598





病床之詞

糸瓜く庵ち梅の皮結せの内に年々芽あつて
 即既二十余年及つと苦くむ事十余年たのむ事
 二十余年あつていと仲秋の下旬いかに病有り
 おうされふううそ結葉成るのみ丸桐う長鯨中ら
 百川成吸よ此く文に生教を志すは枕、寧即う屋孫の
 心地をまをれと定てまううまを後菰といつて三層の
 ぬゝれを舟といはれて有る飯飯をやくてつゝ



中々ち哉葉をば糸所に似て尻より水出せし若し
きや又多かりきや糸所へくちち波のかき流せぬをば

歌仙

風二窓

眼も鼻もあつとて糸所は 葛木

なふ波や川うきき月影のありき 葛人

む虫跡の洞子合をば古琴に 夢太

何あ川と流やめて観るふすし 周竹

み草お後をも水裾ふて田つらと 兀子

た多ちやうち晴れおきの夜を

ふ硝子に供ま川うち新小 石

つ次きく鮫のまを縹うときね

な去くれと髪を五月のちお風を

むむう〜北京と雲のまをこれも

ふら草そくまなう〜我絵の儘ん

かかよりきまや子ねなうらきは

志 東 舟 北 船 了 子 新 月 の 眉
 き 勢 多 晴 乃 却 態 悵 年 秋
 く 川 流 手 入 未 立 却 秋 の 受
 ハ 死 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 う 憂 う り り 子 子 子 子 子 子 子 子
 き き け け け け け け け け け け
 み 又 志 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 や 却 了 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 圭 極 石 巢 羨 人 子 竹

う 薄 氷 に 浮 舟 了 乃 勿 解 川
 志 志 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 む 我 志 坊 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 志 志 川 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 つ つ 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 う う 一 一 一 一 一 一 一 一
 む 志 志 坊 一 一 一 一 一 一 一 一
 堂 羨 人 子 炉 太 竹 堂

三
 三

石 鶯 也 萩 也 あり 秋 后 の 月
 石 鶯 也 萩 也 あり 秋 后 の 月
 く 鶯 の さえ とも 秋 は け け け
 ハ 鶯 ぬ き い 老 婦 ぞ 中 々 ぞ 鶯
 け 斗 市 け れ け 町 中 鶯 ざ ま
 に 鶯 え け け 凡 長 へ 鶯 鶯 鶯 水
 よ よ 一 世 け 中 け 日 志 世 の 中
 り 來 定 鶯 鶯 が 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯
 い い 一 世 乃 來 也 鶯 の 鶯 鶯 鶯

石 巢 圭 大 人 子 竹 堂

追慕

世 一 世 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 世 一 世 一 世 一 世 一 世 一 世 一 世 一 世 一 世
 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

今

哀 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 我 堂

琴もたれ十三筋秋の存 篋灯
ふきぬまほ路一返ふ後うふ 曳美
亡人とむう一借れや悔の凡 葛す妹 綺文
星弦存うき鏡尺弦子白糸 元子

全

十あやうととと也の森や袖ふらふ 旅客 班石
伴やもふかきし おとこ 夢多太

哥仙

見一とひ老海おいさなれありのおろ
は赤仙あまはまもととに吉人此教よ
入く今文れむう一 おとこ げなみ拾ふ

を新書おつうよ おとこ あふま 夢多太

智右うくれぬ子枕此月 葛木
屑魚此初汝うらさき 信夫
争の竹乃なふ子能ち 太
ま 太 錦ういつ 太 う腰は解う 太 里
とくれく 太 ぬ 太 の宰領 太 領 太 夫

之日不_レ少_レ之_レ心_レ未_レ居_レよ_レ長_レ暖_レ簾_レ
 吹_レう_レつ_レあ_レ能_レ繡_レせん_レさ_レく
 今_レ之_レり_レめ_レも_レあ_レ討_レか_レら_レの_レつ
 き_レの_レふ_レ能_レ充_レら_レふ_レ所_レさ_レ
 引_レ裂_レく_レあ_レ能_レ疎_レう_レ好_レら_レの_レ里
 聽_レ流_レり_レそ_レよく_レ希_レ能_レ涼_レ風
 あ_レま_レ月の_レ氣_レと_レ泉_レ月の_レ晴_レら_レり_レ
 百_レ里_レ成_レ着_レる_レ一_レ榻_レま_レく_レり_レて
 才 太 丈 才 太 丈 才 太

若_レ就_レと_レる_レあ_レ時_レも_レわ_レき_レれ_レは_レ無_レ常_レ流
 所_レ係_レ書_レ良_レふ_レう_レ殿_レを_レ眠_レ息
 陰_レ搜_レす_レ未_レ能_レあ_レら_レの_レ聖_レ吉_レ院
 と_レか_レく_レ大_レの_レ何_レか_レき_レむ_レを_レ里
 清_レき_レよ_レ依_レ聖_レ能_レ名字_レの_レ者_レ甲_レ斐_レも
 ち_レあ_レて_レ未_レ事_レ以_レの_レ子_レ系_レ子_レか_レつ_レく
 系_レ禪_レと_レわ_レめ_レ言_レふ_レも_レ夢_レさ_レら_レり
 姉_レと_レん_レ是_レて_レ石_レ山_レ能_レ十_レ月
 才 太 丈 才 丈 才 太 丈

鉛の糸紙衣掛殿乃物とよひ
 小と赤坊と人ハハハハ
 うと心閑乃情と二杯ハハハ
 百目と何とて鐘乃ととと
 花然と耶那とて月ハハハ
 花と茶と秋のやと 女
 黄笠と秋田と格とと例幣使
 古と何とる此後の夕照
 太 丈 寸 太 丈 寸 太 丈

之は下りまうぬ子候まつり松
 世百志とて乃と隠居なり
 乃と下ふぬとととと 太
 掃出好ふ法とまりの神 寸
 樽に茶とて三笑と茶の友 丈
 ととととと乃ととととと 執筆

時雨窓瓢中四季雜詠

入此方
府中

苗代や風花流るる表ひる 盈行

家く子籛于浦乃あつさか 氷花

雲ふり飛る流るる雪ふふ 若振

穂落乃ふりる荒寸雪ふふ 大仙

たかなんて啼下まふな〜時雪 之伸

惟光う未摘まやるのり〜
女 須广

ふ鳥や月ふも海は舞あも 一之

鏡月まほ浮橋ゆ〜りり 仙里

志〜る雲やあの中ふもまほれあ 東牛

〜〜〜んまほ月身啼て日能おん 如終

橋うけぬ里くも那〜ま乃あ 郎娥

水空ふと京と〜〜やふとまほ 茶暇

船よ歸て是とはまきの月也山 月仙
 降すとも十日八義能回極子 嵐十
 娘よとや去るに極る奴 嵐舎
 雪の日ははぬく浮む於鳥 蒼狗
 明ふのよ夕くしよこの山さく 明只
 菟をみる牡丹よ絶然日教む 斗南
 いそぬも春のを行く穠 月 葛人

尺八能暗當本や 梧泉
 花と川て穠振るぬかす川山 巴明
 聖火尺くても里かすむト春の家 梧友
 多茶屋能世にこりよき極山 浦舟
 八お能さきい極して葉山子な 来々
 長字さい海うききて川極る 我年
 うく能すや本に能極るり作勢の海 葛人
 焼燈原身そき麻もこもりる 月巢

遠の志をこぼすてむきりり 居逸
 聖人んと心能ふよ撫莞るを 掬斗
 是日は明石の貴川かきつる 菊友
 分てりるのそをるや草能角 雪房
 りぬや大野ういふつ虫の夢 南樓
 夜と見え月千生能瓢こふ 月叢
 禁制能れハ朽くまかしく 延子

あり清く有る如鏡のうらみ菜 菅路
 花の心坤かきとしくふる余あり 月巢
 とほく大の能市かくれや去の風 菖人
 ふうのささうねあつそめいな 子来
 ささくの後のをるくお宝す 周露
 おい月もつたのよまきふも葉小 六賈
 たまきぬぬの心能せり初九 琴馬

梅うまのや美人も落るる系糸尚 葛溪

まのふらふ葉立結小燈のき雀山 如水

人ふらふかぐして月巾結あやめり 葛人

見ふゆ〜ゆり〜娘〜まき結重 月巢

時有りや漆より里又枯 青架 我堂

初くを結尺つききて娘〜夕さきみ 蘭府

ふるや日傘てわらぬ谷川 馬老

教入や接穂は啼て待時分 呉牛

鴨いとの泣くき心〜放生舎 け其

と〜ん〜と〜れお〜る〜まよ月 葛人

立かてゆ〜ん〜響結月あ〜のな 兀子

あ〜く〜ま〜と〜結〜尺〜よ〜響〜の〜遊〜り〜り 月巢

寄あやや何系結院のむらうゆ 枝光

老より物あるおいらは是等の月 桃壺

とちうううあひまのりんての川 秋車

川越もあつてふふ角力か 如琢

り喜結筆二むん舟りり 矢山

紫翠華や宗女う池の玉簾まを 居友

菜留はまゝく月おくれの表 泉布

水はまへ店しりや小田の秋 烏林

図面結の常づつくく茶 莖 葛人

卯の糸よきき舞う川 根根 月巢

途下弦の糸雀はあつ初れ 南江

坂を結道へあまきく草もくち 菱花

ひとあつて中を冷く夜の月 杜口

ふあやあゆく丸う松の月 再可

き柳やまゝりあよ二之尺 尤逸

鎌くらや草の中くく牡丹 葛人

涼しくもあちやらぬよ草骨と皮 月巢

る暇—かつらの巻よひまらけ 尤更

梅さくや帯新夜を越日あり 喋吾

妻前やは—と日新夜まらけ 月圭

神の焼新木の骨にまらけ—舞月宮 二北

虫いろく—花を明方—月新あ 大雅

川新新ぬき足んらり梅乃新 只言

鬼灯や燈人こめて伝出— 松葉

本かろ—越牛に志のひて女うな 湖遊

さあ—新娘をきいて後日月 其石

七夕や八日—情新星しらま 月巢

谷介て浦中人—娘の風 無染

月日—も啼新新夜の時鳥 昔人

大原や牛新風とふと新巻 兀子

水晶新二葉か—て法も— 都雁

古寺や芭蕉志くねり	東女
藩さへ栲つゝと常ぬ秋の風	夷羨
の月や一水隈あきき船川	笈炊
日生きや風の来流もき井より	亀乞
磐石とらふ残りふへしみ禁山	蕙松
牛捨ふ里や聖ふ能劫朗	葛人
	月巢

赤の糸能立能てや籠月	千山
細代赤とねし中細く水空を	匪石
み竹や今昔ハ窓ハ図西	雷
麦浪ふもき絶て水鶴水	藜杖
短尺残るゑの波や天能川	吐筵
鴨之川や仕舞てかへ不返昔	凉風
接道々柿一本能かへし	笈祭
薄月や築地能終乃ふ芙蓉	莊牧

美しき風の身ふむま燈の 田蛙

鈴鹿をよ響かたり碓の卵 兔勇

鶉鳴し山能むくや麻の夢 桃李

回廊も古き郊のをみちい 菘梅

下京や宵もまりくふれ中 疎水

水行くとそつく尾末の 声

さひしは能新の向ふき落る 月集

筆能縁もさくは玉柄の星 葛人

陽光や轆子眠れ牛童^上耳風

里ひとの足付てをく高焼籠 兼之

ふ家よ月あつりれて燈末の 巴口

帷子や秋の初日能眺さりり 巴水

しりしとて却あつり能家麻の 如水

おれ吐てお位能明り指の 月集

老母てなしくひらやのんを 葛人

清水運
理丁
深心本然うたよ吹雪川かんこる

未見うらふ未見わそれて蕨糸 南浦

小田書て厚の風哉中あは 竹郎

梅本糸とほりてまゝに雉子哉 六耳

陽ちよ物のみ子哉于以浦を系 月代

雉子の糸子新乳大皮を余りり 月杜

本らしみふ芽をふくせぬの煙解い 胤文

ちを減糸や表つかゝ秋の風 松後

蚊一じと撞くま鏡鏡こをとりり 雨十

菊香紙探糸もやうー梅の月 米花

来て見れは一本の紙さうらうの家 秋光

ゆらと紙漁かすむ浦をこの那 習々

畑うちのかすくふき糸まき紙 芦錐

りまきや糸始うらま不こまき 芦中

人ま紙大仏殿うらまこりり 止鳥

葛人

坊亮新吹鳥入浦千鳥 月巢

冬牡丹くゆれとまゝ唐之 庵原 卷而

とれとれて子供つらんを籠 梅雅

大かよあうのかう梅のまゝ雀山 江尻 仙

魚の子とふてえれハ蛙の家 田井 解歌

おハ縄なへと照すや門新月 折臨

裏一ハあろつて床ふきるゝ 月巢

漏桶は穢書とるゝ伏屋可車 葛人

山吹や水ほとくはふ床何ら 大宮 梅富

庭竹は苗代もやま能る 今泉 陽阿

うくひまや杖くぬ山ろむ 根方 茶鶴

林よ茂るも梅は重なる月 素琴

モリ下

十

昔ハ根子きのあ房して木の芽が 把雪
 け中や虫ふるぬきむしの草 布泉
 鶉きや群はるサ八九日 柏原 反哺
 乃ふえれいきあふ鷹て晴まぬ 葛人
 糸核余室かして晴るるり 日稟
 よしきりやりのる能能破 沼津 官胤
 水うる影ふるきて秋能風 雪清

島原も文て海と能能能心 弄沙
 初茄子房能能能心 三島 如髪
 さうらも中とあ葉もるり秋 又里
 心後と町り能能能心 月稟
 新月や能能能能能心 昔人
 更級も地能能能心 九子 嵐考
 草能能能能能能心 国部 松峨

片しおて海あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
月巢

投られし神ほきく角力取
藤枝 珥水

釣竿のおい雪つゝせそ冬牡丹
竜水

お似草や彩そく持まじり
三軒家 周車

古き枝又一歩能く河きい
大賊

志つうはやまハクきき
千潮

舛くきもあかふふとぬおりり
岸 浴梅

笑んとしてふきりりおき山
月巢

あゝ牡丹葉子あゝお人お人
葛人

妻之ぬたけしぬし
田中連 峯月

サゝゝし雪や露のふも川胡鬼
一峯

月哉かゝふゝもあゝ白牡丹
充之

葛葉のゝゝゝ片して枯雪
遊糸

鶏子と鳥ふまゝぬ志くれう車	馬十
喜子や眠るる牛つらひ	花好
吹止て後おのゝもつゝおふ	遊水
初盾やま砂紙様る勢子海	市榮
娘田や欲とをかしり柱て子	龜遊
りふの月ふ馬お玉子一おん	笑水
牛張脊よお梅おぬ桑地門	月巢
吉原へや花か鳥ややおの夢	昔人

一二輪囷や知ぬ子さく々特鳥田 歌舌

美し紅糸は雪の系や女帯玉 周丈

十丈張松又鏡し暮る月 魚光

朽木おとそ草の茂りやさつある 雁里

花かふ山哉南ようれ聖の系 友巴

喜ふおれや晴海りやお結のき 玉峨

お新月立よふさうしなりの心り 千布

モ下

朝夕哉かくて 隠りりかんとぞ 月菓
故とく仙は 新 栴檀の那 葛人

風草花のや立歩も罪ならん 川名連 玄尊

鈴虫や生指花 謝りをもとめし 玄燈

鬼灯花のよと 眠ハ乳房の 壺仙

ささくれやかり月の花の鞠のま 涼浦

さくらきに 三花友なる月の 古栞

新草花の好哉たてねて 月尺花 松翠

味噌草のふまてと衣く 新あまき 葛人

秋の海草を花やうに 暮るりたり 遠列平尾 周竹

かこへては家根へ 揚るる好く 庵山 金谷 月哉

名月や汐のみとり 花清見深 横山 竹摩

吹よせそとみの子 海子ちあ の那 横川 之園

掌くく海花やうし 初さくく 四明

活きれしとて降きぬ 葛人
指喰し女能果なきわら 月巢

东山殿うらむるお月夜月 夢主

花の中ハ雲草しき千鳥心 以席
筆や女も能哉ぬちうひ 菊平

層林まね斗ひき割せ木下雪 玉人
二おくとま鹿落しんん露中 月巢

住能江にう砂のふちをよにりり 葛人

仮初能垣根うつねて燈梅家 相良 柙雨

川之しと處に赤文を右の那 三列國府 寸二

雛子啼や草の気能能ハ事氏 花洛 葦村

妹う子ハ空をあやうにぬたりり 全 儿董

や今焼控ともまき能心 全 蝶夢

水咲咏也水 西原に衣水 川水 皇厚水

夕や暮され夕 聲那夕 浪花夕 旧国夕

去るものハ去 振去 二柙去

て折川も折 際立折 杏庵折

あそひぬものあ 付あ 兼風あ

床の夢床 尾湯床 曉臺床

木が木 一木 也有木

春春 一春 意朝春

依依 全津島依 う依

志志 熱湯志 素因志

蛭蛭 全蛭 理玉蛭

破破 全破 生秋破

ふふ 越前ふ 梨一ふ

くく 嘴州く 布舟く

ああ 全あ 山李あ

一朝一 伯後一 古聲一

七夕や中にも源氏おろそま筑後 官蘭
 晴陰や影をすくしきあの筑前 杏麻
 蒼色や江戸の内裏結し霧り全 春江
 燈中に旭さほくしあす全 志鴻
 よく中八田螺なまると全 船全 萬都
 穂に倦や首おまけて眠る全 蝶醉
 燭もともや床結袋や長崎 支白
 試能悉に全 おもむおま全 果々

うちんあまうに全 つか全 文海
 余能多のすりぬ枝や松の全 有田
 お能能底くく全 月夜全 里美
 葉のふや海入全 河もく全 毒呂
 才造化に晴も晴も全 志全 呂々
 お女能縁ぬいて武蔵野 おふ全 身谷
 此妻此人里ゆ全 ー全 其の川全 具牛
 梅ちう織も全 さぬ全 庭全 那全 以文

七夕

七夕

今も屏に紙を 宗紙ひくり系 或府中 有菟

さしつ所の眼ばやくしる焼毫 全 白雅

葉の紙は草さうさうさう 上徳 谷戸

色分てくさあく紙くく紙 全 落澄

白滝も枯くす紙紙出の部 全 如藍

多るをいしり枯野の早の草 全 砂明

有のくをいしりくくく 全 花嬌

之やたそ禪落くまの忘 全 竜枝

こ月くくく 全 仙略

古かく 全 砂風

百の紙紙に 全 兔友

かん 全 射身

下げ 全 一燈

糸 全 目丸

劫 全 石意

糸 全 金兔

七

丁子花の月にかきてて鏡下総 菅泊
 すも揚て隈あき月を尺る全 巴蓼
 胡鳥に火をく川系花やと系全 秋吾
 赤いの花の月に花山後房利 他後
 外し月花稀渺くや月系早府 兀了
 青梅や足結を呵ふいしく常常陸 嬰兒
 赤子花二系を赤花名海全 太加
 百華くや化り深き一斗仙臺 蓼房

螢火やあつりこれて流河全 菱雲
 降あはみそれあつり梨子の系全 石叟
 赤系くや若菊や月と日花全 古道
 赤中に城の紅舟や赤の月全 雪守
 白菊やまじり月を思ふ全 大江
 白の西に赤くはるるるるの月全 羽冠
 白くくしやして赤花系系全 梅堂
 赤くはるるるるるるる志の妙 嵐

把の葉は流るるうへに花のち 津軽 子成

昔の深しきうへに花の日の匂 全 其友

あまの里を流しはるや 松前 島水

初をや藤にまゝ 出羽 投茶

春の舟は流るる 信列 松羽

胡竹の吹響や 父崎 風直

太田の津波の伝へて来たるを
あつては下りやとあつてあつて
ひめ直しとせし及まを流るる

もれなとみあふとみ 鳴海 学海

道竹も咲くち 鳴海 学海

墨子悲絲 東都之部

縮減ふ千倍 夢 夢太

白を流すをえんとや
きこくし 伊の

白を流すをえん 天府 天府

約鏡に木の葉 不 不騫

初志きましく菊尺の案内さ 菊貫

秋の舟、残斗に志ふる宛油賣 此樂

燈火に後村つづくしてつ體 婆心

あはれに月
環ちきそをのこんふまうハ

このひとく屋さくもよし後の月 千慮

中々にふよりあき柳の卯 丹項

よし女に挟てやうん窓 髪 大方

空を全張あつちあくもめになり 苑枝

さへい出し仲かきりあきぬさ 夢江

月代や海を船舟あきあき 壽梁

夕立や身を控へあきあき 花盟

陽がけさくすくあめくりり 雪氏

流き来てぬくのあしや鼻月海 大弟

明月やあかしくこくあき月 文母

一寸あき又つきあきあきの花 虚舟

未枯に夢の室あきあき 一兆

毛下

七八

雛の糸や黄鳥つとて方遠い
揚江
浪を花とハててぬるらん糸
雨静
おもし泣きととまし乃や夕梅
三駱

絲を何字といはれり言ひし

老の秋是も南す河津是唐かよ
月と也
去凡や網代ううふ古木履
老鳥
後後能きき白しや小豆粥
故流
うしをや海を深あるは麻山
竹城

横中や今朝色能きは海
玉宇
ゆふの枕にきの子能き白糸
祇凡
母系能き女能きあてちまきか
文里
芦もて海舟こくくし夕一れ
巢鷺

一鳥列一尺能き能

糸を能き糸に糸を能きん糸松島
彭壽
海棠やをのく眠子奇合
文理
うしを志まきりに能き片折戸
白羽

とまゝんとして遠くんをうた
 群人
 表節にまひりけりんをの梅
 蓼太
 哀表にまひりけりんをの子
 夫水
 岩うほやんを徹るうり夕煙
 亀二
 去あやまにみとるに舟筏
 辰凡
 んあき人が後りり押つ子
 蕪住
 常子まらりりしよまをせん
 菊子
 疑ふやまの心をくたられぬ
 祇川

霞隔て居るひこさや菊の香
 岐雪
 古今を負ししむり角力取
 分之
 親と子に別あか子糖舟の家
 子典
 あつ秋柳に枝はなうりんを
 月村
 的月や海海をいま子能
 百鏡
 ぬおしむあうをぬらめ誓の表
 汀雨

秋水断橋

橋をたふさく川あや秋の水
 阿也足

茶つげの年終あさよ枯燈を
 志くおのや十粒をくつ石のく
 小浪にまゐや満らん啼き鳥
 晒井やあ志つまひて月ひと
 笠をまきり燈文ふ雪分は
 吹かけやとほまふ終中たらのま
 葉をくくやよれる中より風を
 かいくれて仲持の物や麻能あま

夢阿 歡丈 咏維 南氏 恙水 茂林 古音 山市

小男麻能後漸をわくま月照
 舌解やれの身く終儀
 海見れ角力もあつて雛の音
 行られて措れおんのまあふま
 手洗はふああくくた士あは
 おさくやめあふくくて夏磨敷
 煉掃く物くくくく一了度
 秋月や芥かきけりや照心

東舎 吐論 卓如 那象 百溪 玉紀 時中 五嶺

心の井はさくくはあけぬみさる
 余のちよとまはひりりかき
 いとあはれ様あまやあう衣之
 旅きりや聖んついで竿結先
 螢火結ゆてい高と首へりり
 未枯ややハ柳りいしし
 初午結灯をくやせにささ
 一了場とあはれ給結結ん

流光
 一筆
 魚文
 菊太
 子竜
 壽来
 雲兒
 涼考

こころ結たれとまぬい
 魚尻やあはれけりて
 洞布しきひきまのそはの秋
 甚多結たの光や周結ひま
 みそふりせあへん結糸すし
 此の秋高の身もあはれ
 荒物結都列とあはれ月
 赤くあはれあはれんかき

可回
 北負
 琴古
 雪凍
 普成
 才鳥
 江左
 阿人

日たなききくさかひしくやかへり候
雪珊

門めて能ととるんその月
深松

耕せハ志さうあまのかさ月が
鳳宿

州ささうま姉立りり紙 籬
蘭室

比の来て多に依けりり今朝の故
秋栞

名月や清清而能水の字
物我

よゝゝ川あそ

明日はくろ屋四んみせこ鳥
然我

と後とー能舟もかきりきのお
靴字

いつのらに柳にありて作る幸
西栞

よ能や葉の落おもとまうん
すみ

着水にさくゝ恋ーきい思ふ節
菅奴

草や朝くちさばいさうり
蓼太

中ささうかかぬまもや草 粥
兔明

名月や一水を意もまの中
翠舞

草のさや竹くゝあまふ村在
逸賀

雷鼓空とハけらねりお能月 五嶺
 里すけハ海志つくり婦の月 杖斧
 うくしあもりあすの初まは 七樓
 あぢまいー芳房あかくて作勢梅 宇平
 もにふあてふんれい裏あつお梅は 方壺
 テああう會さるひしつ橋 蓼坡
 六月能男と成て解り那 芋魁
 けまやおーとそりてあふん 文来

麻の角つ戸まにのけておさひし 歌白
 卵う今かろりん鬼ころふ 豆麦
 娘へふ寛のおや田うへ唄 梅素
 りふんれい孤るおー衣えん 飛郎
 永口やあまは能案内の二めを 千牛
 多る能縁にくこく月おは 洗水
 風やま耐錢能みー神髪 青雨
 翅さくくそてまー雛のいふは 尻子

東敵能夕陽にまてましる
築地のうちをまゝ奉りて

今時は釣竿や櫓らん夕さ
舟楫に押て暮ふ細夏に那
生れおれ仙も人能四月に
日枝くハ都さひしき燈籠
夏かこ田探なくし鏡 月
其禮

月輪観

明月や忘ま果てぬ高き美
沙羅

麻様子かして月能名出うか
理麗し人になかきし
志しくしおるにぬくもみちか
取舟にあう川を啼き死せる
ましつる能海苔ひき裂て喰せり
友にすく能ふかうりや能く
夕立しおもふりしあつらふ
こゝれし能舟にあやふし後の月
竺蘭
文雅
扇車
武貞
夜梧
与丈
胤堆
鷺月

玉皇神是に湧らすの川
帰昔

ひらり神

岸つらふを神は一鳥筑波山
完来

菊月附菊葉のあたるところ
神居神ちりひちよと登りて
さきよのはる足跡あけし
やうに化りてあまの御産
めくさくく

秋ちりて美く大鳥神の御水
蓼多

上清靈水

半白ハ神を友とわと忘
色蕉

香にち民神供お納ふ
示右

ふまを神芦のゆけい
凡北

圓うあわゆる表楫の交
去来

月に喜ぶ月の却人
系桃

蛸に雲お虫喰神杖
乙列

空入よき思結結早田赤く

史邦

くあふる能足味

玄哉

押うけて大ふれけり笑を

右

車かにゆれ能首遠

蕉

白川や雲尾め古風ふ

来

吾も尾も荊棘咲りり

北

洗滌ふやい進歩り後業

列

猫のいりし能声もくくめ

桃

とくく志もい下とくおおも

蕉

く家も能能あすましくり

右

く簾人よ名不我足す家月系

好春

去能くく色に朝の清焼

邨

る下り能多しぬかた梅う

北

るほあしくく南吹を

来

隣つうく能あのみり

桃

日哉かきくても駕ふ居る

蕉

三十一

三十一

くさめしき経女あり九十度

まっしつて各遊しる

閑成ふまに繪筆紙出し

杜麻の里新おとく忠一き

そふうとくおつきう新鳥啼

夢中に控ふ後のもまけ

月細く少ゆにぬあふ地花

廿年ぬゆいも境へ唯ふ

北 邨 春 右 北 邨 来 哉

若狭子に居を妻にお建て

あやの病老は白ふ日の新

位くも小き子種おま

たこも新形の凡にうこる

志向の表紙見也花さうり

産にあく子産新おま

邨 桃 哉 来 右 蕉

三十一

三十一

跋

六のろ弦結かあま〜もか〜
あき清と遊ひの跡絶す〜と
風賦比真雅頌結といはよ書るは
風月の年成流しむる結
ゆをよぬこは〜む誠なるの祝
多形や作て〜を給ふ〜を
こ〜にふま蓋と居る者人七元

追送此はいつくもお探あつた
いふ〜
志のふりき浅きをはゆやう
くわら〜
つ〜
時の定心月景

天明三年癸卯十一月

通本町三丁目

西村源六

日本橋南三丁目

前川六左衛門

茅場町宗師堂前

奥村嘉七

江都書肆



